
東京HEAVEN ~ Xの章 ~

いとむぎあむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東京HEAVEN〜Xの章〜

【Nコード】

N3008P

【作者名】

いとむぎあむ

【あらすじ】

靈魂たちの天国。魔人たちの世界。

その場所を逆世界と呼ぶ。

そこで、また新たな物語が始まる。悲しき、兄妹の行方は…。

(これはYの章の続編です)

プロローグ

雪が降る。

雪が積もる。

雪が…溶ける。

この時期は、毎年思い出すんや。怪のことを…。

最後にアイツからもろたのは、この首飾りやったなあ…。

「これ、アタシとお揃いなもの！大事にしてね。これがある限り、アタシと妖兄ちゃんは、ずっと一緒よ」

いつつも自分の跡追い回しとった。んで、二言目には「兄ちゃん、兄ちゃん」。思い出すだけでウザいわ。

でもまあ、正直ホンマはめっちゃ幸せやったんやろな。

せや、お袋がこないな口癖言っとったな。

「大事なモンはなあ、失ってから初めてその重みに気付くもんや。せやから、妖も怪も、自分の大事なモン一生懸命守るんやで？」

もう失ったわ。手エから滑り落ちた瞬間が、一番痛^いん^んや。手エ伸ばしても、もう届かんのや。

せやから、もう伸ばすんはやめたわ。

最後にするで、怪。

雪が降る。

雪が積もる。

雪が…溶ける。

「…妖、兄ちゃん

ッ！」

ドックン……！

プロローグ（後書き）

*予告

過去の記憶。因縁の名前。冷たい青年の殺意は、誰に向けられたものか。

次回『氷帝の魔人』

氷帝の魔人

ここは、逆東京都の北側のとある路地に建つ店。名を『魔薬専門店 蘭瑛』^{らんえい}という。代々魔人一族の内海家が営んできた薬屋。現在店主を勤める内海瞬英^{つみしゅんえい}は、あの魔王に一目置かれるほどの天才魔薬師である。

そして、今店番をしているのは、彼の孫で桑田の護柱^{ナイツ}の一人である狐目こと、内海妖^{うつみょう}だった。お気に入りの煙管^{キセル}を吹かして、店内を煙で充満させていた。紫煙の充満した店のドアベルを鳴らして来店してきたのは、なんと同じ護柱^{みどつたかき}の御堂隆樹^{りゅうじゆ}だった。タバコの臭いが大の苦手で、滅多にやって来ないため、妖は一瞬目を疑った。

「いらっしやい。珍しいア、あんさんが来よるなんて。今日は何ぞ用でつか？」

「あゝ。二日酔いに効く薬なんて…あります？」

「は？」

……まさか、この魔薬で有名に店に二日酔いの薬求めてくるとは…。

さすがの妖も少し驚いた。隆樹は、言うんじやなかった！ という顔で俯いている。

「…え…っと、すみません。ない…ですよね？」

「おますよ」

「……へ？」

「ウチは薬ゆもんなら、なんでも取り扱ってるさかい、ちゃあんとあるで。どんなんがええんや？」

「えっと…。一番効きそうなヤツで」

「一番効きそーなヤツでつか…。んー」

妖はカウンターの向こう側の棚を捜し始め、いろいろと埃を被った薬たちを奥の方から引つ張り出していく。…大丈夫か？

「お！あつたでエ。これや、これ！」

「…液キヤベ」

「せや！二日酔いゆうたらこれや！…にしても、二日酔いゆうのは桑田はんか？」

「うん。同じ管理者さんたちに飲みに誘われて、飲んだそうです。お酒弱いのに」

「そりゃ、大変やったなア」

「はい。で、いくらですか？」

「ん〜。ま、千円」

「え、高?!」

と言いつつも、サイフから千円札を出す。そして、小瓶の液キヤベを受け取ると店を出て行った。

妖はいつもの笑顔で手を振る。やがて、隆樹の姿が見えなくなる。と、一服して背後に視線を向ける。

「ごきげんさん、姐はん」

すると、障子の向こうから、一人の女性が現れた。

「はっ、気付いてたか。完全に気配消してたと思ってたのによオ」

「伊達に何年も護柱ナイツやってへんわ」

妖の後ろにいるのは、元・護柱ナイツの（仮）メンバーで妖の伯母・内海イサナだった。今は仕事のせいであちこち放浪している。そのため、いつもどこににいるか分からない。

「今日はアンタに面白い情報持ってきたよ」

「…いらんわ。どーせ金取んのやる？」

「そーねエ…、妖のおいしいご飯が食べたいな〜」

「なんや。そんなんでええんか？」

「フフ。妖は義妹いもつとより料理うまいからな」

「お袋は主婦向きちゃう人やったからな。で、情報ゆうんは？」

妖は、煙管の灰を捨てると、店のドアに「清掃中」という看板をかけて座りなおした。

イサナはまず、店の奥の座敷にあった新聞を取り、一面の見出しを見せた。

「新聞読まないアンタでも、これは見たでしょ？」

「…大魔人が一人死んだつちゅー話やる？」

「ええ。で、この次の大魔人が、内海怪^{うちみかい}。アンタの妹なのよ」

内海怪。元・護柱^{ナイツ}メンバーだった内海啓祐^{うちみけいすけ}とその妻・和香^{わか}との子で、イサナの姪、妖の実の妹である。訳あつて、政府に保護されていたのだった。

「ま、そーなるんやろな。大魔人候補は、怪と姐はんの二人しかおらんさかい」

「アタシは大魔人なんてメンドーなものやんないわよ。そしたら、必然的にあの子になるんだよなア」

「……」

今日は珍しく妖の眉間に皺が寄っていた。その様子にイサナは溜め息をつくしかなかった。

そこへ腰を叩いて杖をつく老人が店の奥の階段から下りてきた。

「おじん、もう腰痛はええんか？」

「フン。イサナも来てたか。どーせ、怪のことも話してたんだろ」

「…」

「ひゅ〜 親父、暫く見ないうちに地獄耳になつたんじゃねーか？」

「そんなんじゃないわい！」

この老人は聞いた通り、イサナの父で妖の祖父の天才魔薬師・内海舜英^{みしゅんえい}である。この前までは風邪、そして今回は腰痛で店を妖に任せていたこの店の店主。

「それより、妖。お前さんに電話じゃ」

「僕に？」

店の黒電話ではなく、家の電話かららしい。いつもは、店の電話が基本なのに、と妖は首を傾げた。そして、本体の横に外された受話器を耳元へと導く。

「はい、変わりましたで」

「ああ。久し振りだね、妖くん」

その声の主は、逆東京都管理者の桑田宗助^{くわたそうすけ}だった。

「ああ、お久し振りですう。桑田はん」

『元気でやつてるかい？こっちは今日も掃除をやらされてるよ』

受話器の向こうから、桑田の声に混ざって確かに羅刹の怒鳴り声も聞こえた。妖は思わず苦笑した。

「ほんで、二日酔いのほうはどや？」

『おかげで、いつもの調子が戻ってきたよ。……妖クン、君に仕事を頼みたい』

「なんや？」

桑田は少し間を入れて、本題に移った。

『大魔人が一人死んだことは知ってるね？その後、評議会と元老院の決定で、一週間後正式に新たな大魔人として“内海怪”が加わることになった。で、妖クンには大魔人候補の内海怪を一週間警護してもらいたい。いいかい？』

「……わざわざ僕に頼まんでも、羅刹チャンがおるやろ？」

妖の回答は嫌そうではなかったが、あまり乗り気でもなさそうだった。妖は気を紛らわそうと、電話の横にあったボールペンを回して手遊びを始めた。

『はあ……。妖クン、もし彼等が噂を聞いて動いていると、知っても断るかい？』

「ッ！」

妖のペンを回す指が止まった。“彼等”という言葉聞いて。

そして、口元に笑みを浮かべ、ペンを手の中で真つ二つに折った。

「へえ……。来るんか？奴等」

『ああ。逆京都から連絡が来た。間違いない』

「……フ。ええよ。引き受けたるわ、その仕事」

『そう言ってくれて助かるよ』

妖の脳内を横切るのは、自分の胸を貫いたあの氷の感覚と、怪の泣き顔。それを思ったたびに、妖の怒りはすさまじく増していくのだった……。

ついに来たで、この時が

氷帝の魔人（後書き）

*予告

私はずっと前からここにいます。昔、兄と私にあった出来事。その時の傷はまだ癒えず、この胸の中に残っている。いつになったら、私たちは……。

次回『過去の傷、その名は「リキョウ莅豹」』

過去の傷、その名は「莅豹（りひょう）」

希望は、ずっと前に捨てた。神によって取り上げられた、私の自由。もう二度と私は飛べない。

でも、何年経っても捨てられないものが、一つだけある。これを捨てたら、私はもう人間ではない。

逆東京都 とある豪邸

ベッドから起き上がり、大きな窓辺に近づく一人の少女。栗色の髪を一束に三つ編みにする少女の水色の瞳は真っ直ぐに空を見つめ、どこか悲しく揺れていた。

そこへエプロン姿の使用人の女性がノックして入ってきて、錠剤の薬と水をテーブルに置いた。

「石榴様、お薬をお持ち致しました」

「綾子。2人だけの時は、二つ名ではなく本名でお呼びなさい」

「…はい、怪様」

この少女の名は、内海怪。一週間後、大魔人に就任する少女である。

二つ名とは、大魔人と四天王が本名を悟られぬように、昇格すると共に貰う名である。名前は、その人物に相応しい花言葉を持つ花の名が与えられる。ちなみに、大魔女でもあり四天王でもある歪蘭玉は、“桔梗”の二つ名を持つ。

怪はこの名が嫌いである。石榴の花言葉は“優美”と“愚かしさ”。こんなにも醜い自分のどこが上品で美しいことか。怪は所詮、上の四天王にとって愛らしい飾り物でしかない。何の害もないと思っ、自分を次の大魔人に選んだのだ。それが、悔しくて仕方なか

った。

ぐつと下唇を噛み締めっていると、暗い部屋のカーテンが開き、光りが部屋を満たした。

「さあ、今日はとても良い日ですよ！」

「？」

「今日は、怪様の護衛に逆東京の護柱ナイツの内海妖様うつみょうがいらっしゃるのですから」

「?! 妖お兄様が？」

綾子の吉報により、怪に曇った表情は一変して、太陽のように輝いた。

一方、内海宅“魔薬専門店 蘭瑛”では

腰痛の治った店主の内海舜英つつみゆんえいが店番をしていた。そして、遅めにイサナが起床してきた。

「ふあゝ…あ？妖はどーした？」

「もうとつくに出掛けたわい。もう日はてっぺん昇ってんだよ！」

「アハハハ。ちよつと寝過ぎしたぜ。…妖、怪の護衛に行ったんだろ？仕事で」

「…ああ、仕事だ」

舜英は静かに言う。そして、イサナはバツが悪そうに部屋の奥へ引っ込んでいった。

車で怪のいる豪邸へ向かう妖。その心は静けさを保っていた。しかし、闘争心は見え隠れし、その証拠に両手には既に武装が施され

ていた。

そして、そろそろ到着と聞きつけ、怪はずっと窓の外を見つめていた。すると、門が開き車が一台入ってきた。

「綾子！妖お兄様がいらしたわ！」

「石榴様、帯がまだ結べておりません！動かないでくださいな！」
バタバタとする2人を他の使用人たちは微笑ましいことこの上なく微笑んでいた。

車から降りた妖のもとに着物を着こなした怪がやってきた。

「兄様！」

妖へ満面の笑顔を向けた怪の姿を目の前にした妖は無言で跪いた。

（

え？）

「本日より石榴様の護衛を任命された逆東京都 護柱ナイツの内海妖です。石榴様のお命、全力でお守り致します」

怪が失望した。 13年という年月が2人の関係を崩してしまっただのだと。

怪は涙を堪え、なんとか声を絞り出した。

「あ…ああ。任せた、護柱の内海妖」

「お任せください」

怪は背を向け、ぐっと下唇を噛み締めた。

「…。私は疲れた、部屋で休む」

そう言っつて、怪は逃げるように部屋へ戻って行ってしまった。その後ろ姿を無言で見つめる妖の薄荷色の瞳の奥は微かに揺らいでいた。

部屋の鍵をかけ、ベッドに身を投げた怪は、これほどまでにない悲痛な泣き声を上げた。

心配になった侍女の綾子はドアの前で必死に呼びかけていた。

「石榴様！…っ怪様！」
「っ来るな！！一人にして」

楽しみにして、浮かれていたのは自分だけだった。妖は…兄は仕事のために来たんだ。仕事の時、標準語になるのが、その証拠。妖は、仕事の時と本気で怒っている時だけ標準語になる癖がある。もう、前の関係には戻れないのだろうか…。

「…怪様。落ち着かれましたら、庭園に妖様と行かれてみてください。怪様のお育てになられた薔薇がやっと咲いたんです」

「…ええ」
怪はそっと目を閉じる。

……。

桑田宅

羅刹はいつも通り、桑田家の掃除。隆樹は学校で少し送れるとのこと。そして、桑田宗助は真面目に新聞など読んでいる。

新聞に集中していた桑田の意識が、突然削がれた。

「?どうしたの」

「…逆長野の管理者から、伝達が来た」

「ふーん。管理者同士のテレパシーみたいなやつ？」

「ああ。…中国地方（近畿地方）との境界に張っていた結界が何者かの手によって破られた。綻びが生じたのは、逆愛知”とのことだ」

その知らせを聞いて、羅刹は思わず掃除機を手から落としたり。

「どういうこと！？門の目を欺いてこの中部（関東）に入り込んでっというの！？何者よ？」

「…妖クンに連絡した方がいいかも。“奴等が来た”って」

「奴等…？」

「そう。昔、妖クンを殺した奴等だ」

……。

「ねえ、庭へ散歩に行きたいの。ついて来て」

妖は怪の突然の申し出に、少々驚いたが素直に引き受ける。

赤、白、黄、中には青なんてものもある色とりどりの薔薇。庭いっぱいに咲くこの薔薇は、ここでの孤独を紛らわせるために怪が大切に育てた特別なものであった。

「ここには、警備がまつたくないの。ここで戦闘が起こったら、花たちが潰されてしまうもの。その代わり、ここには逆長野の管理者と評議会会長が張ってくれた強力な結界があるから安全なの」

「……警備がない。では、人目もつかんちゅーことやな？」

「……え？」

妖の言葉遣いが変わり、振り返ろうとした怪の体は妖の両腕によつて抱き締められた。

「あ。やっと怪に触れられたわア」

「よ、妖？」

状況が飲み込めず、あたふたした怪が妖のことを名前で呼ぶと、妖は少し寂しそうな顔をした。

「前みたいに“兄ちゃん”呼んでくれへんのか？」

「あ……兄さん？」

「そや。本当に大きゅうなったなア」

「く、苦しいよあ……、につ兄さん……ッ！」

「ん？何泣いとんや？」

怪は何故か不思議と涙が溢れて止まらなかつた。

「しゃーないな。ほれ、好きなだけ泣いたらええよ」

怪は嬉しくて涙が零れた。妖の許可をもらい、怪は思う存分泣いた。

数分、泣き続けて疲れた怪はベンチに座り、妖の肩に凭れ掛かった。

「……ねえ、兄さん。私ね、本当は大魔人になんかなりたくないの。ずっと、ずっと兄さんやおじいちゃんと一緒にあの家で暮らしたい。こんな能力ちから、望んで手に入れたわけじゃないのに……」

「……せやな。僕も怪がずっと傍そばに居おつてくれるなら、他はなーんもいらんわ。たとえ、僕と怪だけの世界になつたとしてもや」
「兄さん。あのね、私、ずっと……兄さんのことが」

ソワ…ッ

怪が妖に言いかけた瞬間、2人の周りに背筋が凍るほどの冷気が漂い始めた。

「！兄さんっ!?!」

「っ……」

妖からはただならぬ殺気と噴くような汗が額を流れていた。

「兄さん……」

「……奴や、奴の気や!」

妖はぐつと胸部を抑え、まるで走馬灯のように、“あの時”のことが頭の中を駆け巡っていた。

そして、屋敷の外に黒服の男と同じく黒に身を包んだワンピースの女性と左頬に刀傷のある男が現れる。2人を見つめるように立ち止まり、屋敷を囲む鉄格子に触れる。

「……ふっ。管理者の結界か」

「!?!」

男が鉄格子の間の空に手を触れると、空気が揺れた。そして、空気が泡となって散った。それは、逆長野の管理者と評議会議長が張った強力な結界だった。

「なっ、なんで…!?」
「っ…! 会いたかったで、孤陰エ!!!」
「え…」

「フツ。13年ぶりが、内海妖」

フードを外し、現れた右目に火傷の痕のある男の顔を見た瞬間、妖の眠っていたドス黒い「怒り」という感情が滾り始めた。

「久しいな、内海怪。我を覚えてるか? 13年前、お前達の父と母を殺めたこの“荻豹”のリーダー・孤陰を!!!」

我は再び、そなたを奪いに来

たぞ!!!

過去の傷、その名は「莅豹（りひょう）」（後書き）

*次回予告

13年前、私たちは何かを失った。最後に残ったのは、妹と兄だけ。だから、私は、あなたのために。

13年前、僕たちはすべてを失った。残ったのは、兄と妹だけ。だから、僕は、君のために。

次回『兄は妹のために、妹は兄のために』

兄は妹のために、妹は兄のために

13年前、私は5歳で兄さんは9歳だった。護柱^{ナイッ}として任務に向かった両親の帰りが遅いと、様子を見に行った妖。それを慌てて追いかけた私。そして、兄が見たのは、まさにあの男が父にトドメを刺す寸前だった。

「父さんッ!!」

冷たい氷が父の体を貫いた。

溢れる血の臭い。肉からズルリと刃が抜かれる時の嫌な音。

あと少し… あと少し、着くのが早ければ。あと少し… あと少し、叫ぶのが早ければ…

両親は死ナナカタノ二…

……。

庭園に立ち込める冷氣。戦闘が始まってから約10分ほど。そこには、傷だらけの妖と無傷の孤陰。そして、それを心配そうに見つめる怪と、勝利を確信し微笑む孤陰の部下。

一滴一滴ずつ流れる妖の血。そこには涙も混ざっていた。

「くっ、はあ… ツ！負け… へんで!!」

「フン。しぶとい。しかし、13年前から何一つ成長していないな」「ッ何やて!？」

「そうだろ？結局、お前は今も昔も妹を守れぬまま、無力に地べたを這っているではないか」

その言葉に、妖は衝撃を受けた。拳を握り締めて唇を噛み切った。妖の中で渦巻いたのは、己の無力さに対する怒りと、ドロドロとした屈辱感。そして、過去と今への後悔。また、守れないのか、

と自らに問う。

孤陰は手袋を纏った左手を氷で刃のように凍らせ、右手で妖の髪を掴み上げて、左手の切っ先を胸部に向ける。そして、そのまま妖に突き刺そうとする。

体が、強張る。“また”目の前で兄を失ってしまう。もう、『やり直し』は出来ない。

もう、出来ない…！

「あ… や、やめてエ…！！」

炎技えんぎ その12ノ章・黒炎ベルフレイム

弓・アロー

突然、孤陰の頭上に黒い炎で形作られた弓矢が現れ、孤陰目掛けて落下してきた。

孤陰は咄嗟に妖を怪の方に放り投げ、矢を避けた。

「チツ。何奴!？」

「妖、一つ貸しだからね!」

「無事でよかった」

「全員、目を閉じてるよ…!!」

そこにいたのは、羅刹と桑田、隆樹だった。妖は隆樹が左目のコンタクトレンズを外そうとしているのに気付き、最後の力を振り絞って、怪の眼を覆い抱きすくめた。

瞼の裏からでも微かに分かるほどの真っ赤な光。突然の光りに孤陰たちは動揺した。

「!?!?この光りは…!」

「孤陰様！煉獄眼デイスホールドです。ここは退きましよう！」

「ぐっ！仕方ない、一旦退くぞ！」

孤陰たち3人は退却し、それを追おうとした羅刹を桑田が止めた。隆樹もコンタクトを付け直し、ひと安心したのは、ほんの束の間。

「兄さんツ?!」

怪の腕の中で倒れている妖の体力は限界に近く、さらに高熱で気を失ってしまったのだった。

……。

やがて、雨が降り出した。

妖の高熱は一向に下がらず、今は駆けつけた祖父の舜英が看病している。

怪とその他の皆は別室で待機していた。

「えっと……。で、桑田さん。俺、何の説明もなしに連れて来られたんですけど」

「ああ、そうだったね」

「あの……。私から、皆様にお話しさせてはいただけませんでしょうか？」

「あ、怪クン……。いや、石榴様。お願いします」

「……。あれは、今から13年前」

……。

今から13年前。桑田率いる旧・護柱ナイツが逆東京都を守っていた頃。舜英の息子・啓祐けいすけとその妻・和香わか、そして2人の子供、9歳の兄・妖と5歳の妹・怪。この5人で暮らしていた。舜英の妻であり2人

の祖母・英奈^{えな}には去年先立たれ、啓祐の姉・イサナは逆世界を放浪する身であった。

護柱の一人であった啓祐は、その日この逆東京に反政府派のグループが不法入県したという知らせを聞いて医療魔力を使う和香を連れて、出掛けて行った。

両親の帰りを待つ妖と、一人楽しそうに遊ぶ怪。すると、舜英の店番する店に桑田が息を切らして駆け込んできた。

「っ！何事じゃ!？」

「イ、イサナさんはッ!? 大変なんですッ、啓祐さんが…!!」

その時、妖は桑田の言葉を聞いて、家を飛び出して行ってしまった。祖父の止める声も聞かずに。それを見た怪は、何か胸騒ぎを感じ、兄を追いかけた。

走っていた妖が最初に見つけたのは、父の足元に転がった母の死体。そして、その前に膝をつく父の姿。黒い服の男は父の首を掴み、右手に備えた氷の剣で父の胸部を一気に突いた。

「ッ！父さん　　ッ!！」

ズルリと抜かれた氷の剣は、父の血で染まり物凄い血の臭いを放っていた。妖は倒れた父に駆け寄り、体を揺する。

「父さん、父さんっ!」

「…ッ!につ、にげろ…、逃げ…ろっ、妖!!!」

妖の背後に迫っていた男は、妖の体を片手で持ち上げ、じっと見る。

「この男の息子が。……目撃者は、排除だ」

「ぐあッ!！」

妖の首を強く掴み、締め付ける。そして、左腕を氷で凍結し、父のように胸部を貫こうとする。

と、その時。左腕に怪が飛びついた。

「やめてえええ！……！！！」

この時のことを、怪は今でも後悔している。ちゃんと阻止していれば、妖は…。

すべて、私のせいだ…ッ！

兄は妹のために、妹は兄のために（後書き）

*次回予告

あの事件が、怪の人生を変えてしまった。全て、僕のせいや。あ
ないなことをしなければ、怪の能力は知られることはなかったや…。
次回『蘇生の魔人』

蘇生の魔人

全部、僕が悪いんや。僕の浅はかな行動で、怪は自由を奪われた。せやから、もう二度と失うわけにはいかへんのや。

もう、二度と…。

……。

妖は呼吸がうまく出来ず朦朧とする意識の中、目の前の男の背後の小さな影に気付いた。

怪だ。怯えた表情で妖と男を凝視していた。妖は気付かれないように掌に氷で“逃げろ”と形作り、薄く弱々しく微笑んだ。

「やつ、やめてええええ!!!」

しかし、怪は逃げなかった。逃げることなく、男の左腕に飛びついた。

「ぐっ!!? 離せ!!!」

「きゃっ」

怪は振り落とされ、地に転がった。そして、ハッと振り返ると、顔に鮮血が飛び散った。

「ッ!? 兄さんッ!!!」

「っ…か、い…」

地に落ちた妖を抱き締め、涙する怪。その怪までも始末しようと手を伸ばす男。しかし、

(バチッ)

「ッ!？」

怪の周りの空気が渦巻き、男の手には電流のような衝撃が走った。驚いた男は咄嗟に手を引つ込めた。

そして、光り出した怪の体。その光りは怪と妖を包み込み、花びらの形になると蕾のようになったのだった。

逆茨城 逆水戸

芦原邸宅

「…?」

「…どうかしました? 慧翠^{けいすい}。この歪蘭玉を目の前に余所見ですか」

「…フツ、君があまりに美し過ぎるから直視できないだけさ。愛してるよ、俺の桔梗」

そう言つて蘭玉の顔を上に向かせ、口付けしよとする男の唇に、今度は蘭玉が人差し指を添えて制止した。

「軽々しく愛を口にしないで。悪いクセよ。気付いてるんでしょ? 『禁忌の第四の力』を持つ者が覚醒した」

『禁忌の第四の力』。それは、“蘇生” “破壊” “呪詛” “時渡り” といった四つに関連する能力のこと。この能力は禁忌とされ、今まで四天王と呼ばれる元老院と評議会が保護してきた。

「…内海怪^{うちみかい}。5歳、女子。ずっと前から気付いてたさ。だが、普通に生きてれば覚醒はありえない…はずだった」

「…行きましょう。お茶会は中止ね。仕事に行くわよ、慧翠」

「はいはい。今度は、一緒にアフタヌーンティーでもどうだい? 蘭玉」

「…喜んで」

評議会議長・あしはらけいすい芦原慧翠と大魔女・歪蘭玉が、逆東京へ向かう。

光の中で、怪は死体になって冷たい妖の名を必死に呼び続ける。

「ねえ、妖。私、私ね。妖が好きなの。大好きなの。本当は、きょうだい兄妹に生まれなくなかった…。それぐらい、兄さんのこと、好きだよ」
「だから、死なないでよ。私を、独りにしないでよ……」

死なないで！兄さ

ん！！！」

光の外では、男とその仲間が呆然と見つめていた。

「孤陰様！この能力は…もしや！」

「…っ！搜したぞ…！！」

「やっつと、あの方を…」

やがて、光の蕾は花開き、中から妖を抱き締めた怪が現れた。

「…んっ」

と、その時。怪に抱かれて死んだはずの妖が、息を吹き返した。

怪は驚きや何故？という感情よりも先に、嬉しさがこみ上げた。

「兄さん…！！」

「フッフ。見つけたぞ、蘇生の魔人よ…！！」

「…え？」

両手を広げ、高笑いする男。そして、興奮が収まると怪に手を差し出した。

「…？」

「来い、この私と。お前のその力が必要だ」

「……行かない」

「…拒めばその少年をもう一度殺し、無理やり連れてゆく。お前の力は、“その対象の人間を一度だけ蘇生する力”だ。次、その少年が死んだら、お前は今度こそ、兄を永久に失うぞ」

失う。その言葉に、怪は唾を飲む。ついさっきまで感じていた兄を失った悲しみがまた…。

そう思うと、恐ろしくてたまらなかった。

「……兄さん」

怪は妖をギュツと抱き締めた後、そつと妖を地に寝かせ、立ち上がる。

「フツ。良い判断だ」

静かに男へ歩み寄り、差し伸べられたその手をとろうとした、

その瞬間。

怪の背後で眩い閃光が光った。

「!?!」

「くつ!?!目くらましか!?!」

煙の中から姿を現したのは、上着をはためかせる評議学会長の芦原慧翠と、大魔女の歪蘭玉だった。

「魔王に仇名すテロ組織・莅豹のリーダー・孤陰!」

アナタの身柄を拘

束します!!

蘇生の魔人（後書き）

*次回予告

この想いは、誰にも知られてはならない。相手に悟られてはならない。

この関係を維持するために、私は何も言わず、アナタから去っていく。でも、大丈夫。私とアナタは、対なるペンダントで、繋がっているから…

次回『愛しき人の言葉』

愛しき人の言葉

この想いを、形に出来るでしょうか？

言葉で伝えられないこの想い、アナタに…。

「魔王に仇名すテロ組織・莅豹りひょうのリーダー・孤陰こかげ!!!アナタの身柄を拘束します!!!」

閃光と共に姿を現した大魔女にして四天王の一人・歪蘭玉ひずみらんぎょくと評議会の長・芦原慧翠あしはらけいすい。

「チツ。大魔女と芦原の若頭は厄介だ。退くぞ!!!」

「はっ」

孤陰の吹雪によつて、莅豹は姿を消した。怪は一気に腰が抜け、地に膝をついた。それを蘭玉が受け止めた。

「…っ。ありがとうございます。蘭玉様、芦原様」

「大事ないか?…:兄の方も大丈夫そうね、よかった」

「即刻で悪いが、聞いてもらおう。内海怪うちみかい、レベル最高位・レベル1以上の魔人として、我々評議会が正式に保護することになった。一緒に来てもらおう」

「……え?」

「慧翠!」

「もう一度言おう。レベル1の魔力を持つ、“蘇生の魔人”内海怪。

君の身柄を我々評議会が保護させてもらう」

怪は、混乱で言葉がうまく出せなかった。

蘇生？何を言っているのだろう。

「……私が、…蘇生の…魔人？」

うつみょう

「そうだ。その証拠に、君の兄・内海妖は体を貰かれたにもかかわらず、こうして生きている。君の力は、奴が言った通り“その対象の人間を一度だけ蘇生する力”だ。これは“禁忌の第四の力”の蘇生に当て嵌まる。よって、政府が君を保護する。反論は認めない」

「慧翠！突然そんな話しないで！混乱状態のこの子がまともに返答できるとお思い！？」

すると、蘭玉の腕をすり、と抜け、怪が慧翠の前に立つ。

「私は、

」

逆東京 とある病院

個室のベッドに寝かされた妖は、やがて目を覚まし、自分の横でうたた寝する怪を見つける。

「…怪？」

「…んっ。…？兄さん！！」

「ごっ、ジョーイン」

はっと怪は自分の口を手で抑えた。妖は上半身を起こし、右手で怪の頭を撫でた。

「…なんで僕、生きてんのや？」

あの時、確かに自分は男の手によって、体を貰われた。はずなのに…。あの瞬間のことは鮮明に覚えているのに…。

「あの…、あのね。兄さんが倒れた後、すぐに蘭玉様と芦原様が駆けつけてくれて、兄さんは一命を取り留めたの。大丈夫、そんなに深くなくて、痕も残らないって」

「そうか、心配させて堪忍な」

怪は静かに首を横に振った。月明かりで照らす個室で、怪はカバンから綺麗にラッピングされた箱を取り出す。箱には母によるバーンカードが添えられていた。

「！これ、お袋！？」

「うん。こつそり準備してたらしいの。ほら、私の誕生日、明後日でしょ？」

怪は涙ぐみながら、丁寧にラッピングを解いていく。中には、チエーンの2つ付いた大極図のペンダントが入っていた。

これを見て、2人はハツとあることを思い出す。

「これって…。昔私が、店先で欲しいって強請ったペアのネックレス！」

「せや！せやけど、高^たこうて買わなかったんや」

「そう…。お母さんは、“大切な人が出来た時、2人で仲良うつけたらええ”って…。…っお母さん…！！」

涙で滲むメッセージカード。でも怪は、それをぐつと堪え、ペンダントを2つに分けて、黒い方を妖に渡す。

「…もろうても、ええの？」

「うん。兄さんに貰ってほしいの」

「…おおきに！めっちゃ大事にするわ」

「これで、私と兄さんが、どんなに離れていても一緒。ずっと、一緒だよ？」

「せやな。言われんでも、一緒や」

「…うん」

2人はその後、少し話しをしてから、怪は病室を去って行った。病院を出たところには、芦原慧翠と使用人の運転する車が停車して

いた。

「別れは…済んだか？」

「…別れじゃ、ありませんよ。…必ず、妖はここまで来てくれる」
怪は一時、妖の病室を見上げると大人しく車に乗った。

*
*

翌日。傷も完治し、平気と言われて退院した妖。そんな彼を待つ
ていたのは、最愛の妹との別れ。

「っ！そないな話！？っ…嘘や！！怪が…ッ」

「腹ア括れ。ワシ等じゃ、力不足じゃ」

「っ！！畜生ツツツ！！！！」

妖の苦痛で悲痛な叫びは、逆東京に響き渡った。

仲睦まじい兄妹。きょうだい

離れ離れになった2人に残ったのは、

虚しい想いと、片割れの勾玉のみ…。

せやから、今度こそ

…！

愛しき人の言葉（後書き）

*次回予告

許されない。そんなこと知ってる。どんな目で見られようと、
蔑まれようと、私はこの想いを捨てたりしない。
けど、決して伝わらないのは……。。

次回『妹が兄を愛した禁忌』

妹が兄を愛した禁忌

許されなくてもいい。
軽蔑された方がいい。

私は、妖を…兄を、愛しています。

雨音の響く部屋は沈黙に覆われた。過去話を耳にした隆樹と羅刹は、昔ある少年を守ってある少女を愛した『御堂ツバサ』のことを思い出していた。そこで、沈黙を破ったのは、怪だった。

「私は、今でも全てを後悔している。…でも、間違ってるとは思わない。あれが最善の方法だったから。それでも、選択肢が無数になかった、無力な自分に、私は、何年も後悔してるの」

「…怪クン。…いえ、石榴様。内海妖が負傷したため、以後我々が護衛につきます。よろしいですか？」

「ええ。少し、一人にしてください。大丈夫、もう庭園には出ません」

「はい」

怪は少々疲れた様子で部屋から出て行った。向かった先は妖の眠っている個室。扉を開けると、妖の眠るベッドの隣で椅子に座ってうたた寝する祖父の舜英がいた。

「おじいちゃん、おじいちゃん」

「…む？怪か」

「ちよっとだけ、席を外してくれる？」

*

「……ちよつとだけじゃぞ？」
「うん」

椅子を持って廊下で待つことにした舜英。

二人きりになった妖と怪。怪は静かに眠る妖に歩み寄り、額に手を当てた。顔色が良く、怪はほつとした。それと同時に、これは私のせいだという自分の非力さを痛感させられる。この傷は自分を庇って付いた傷。自分は結局、守られてばかりだ。

怪はベッドに腰をかけ、眠る妖の頬を優しく撫でる。そうしていくうちに涙が零れてきた。

「ごめん。ごめんね、妖…兄ちゃん」

「私、あの頃から全然成長してない。昔と同じ。一人じゃ何も出来ない子。“怪”の意味は、他人より優れてるの意。でも、私は何も出来ないよ……っ」

零れた涙の粒が、妖の頬に落ちる。怪は少し、人知れず泣いた後、何事もなかったかのような顔で部屋を去って行った。そして、再度妖の看病に戻った舜英は、妖の狸寝入りに気付き、声をかける。

「なんじゃ。起きてるなら、怪に声かけてやればいいじゃないか」

「……アイツ、泣いとつた。…僕は、またあないな顔をさせてもうた。…情け無いで……」

妖は、完治しかかっている下唇の噛み切った傷にまた、犬歯を突き立てる。

評議院・休憩室

この後の会議の前に一服しようと紅茶を入れる蘭玉の背中から近づき、彼女にそっと抱きつくのは、あしはらけいすい芦原慧翠。

「何？熱湯使ってるのだから、危ないわ。ピアニストが指を火傷したら大変よ」

「フン。いつの話をしてるんだ。それは、俺がまだ大魔人“露草”つゆくさだった頃の話だろ？今じゃ、何も弾けないさ」

「で？何の用」

蘭玉の冷たい声色にやつと真面目に話す気になった慧翠。蘭玉から離れ、椅子に腰掛ける。

「逆神奈川で、大量に魔人、魔女が失踪している。目撃者の情報だと、犯人は右目に火傷の痕がある、黒服の男」

「！？孤陰が動いたのね。その様子だと、彼はすっかり怪の能力について知っているようね」

「ああ。蘇生の能力は、ノーリスクで出来るわけじゃない。誰かを蘇らせるには、その時死期の近い者の魂を吸わなくてはならない。

百年前の蘇生の魔人は自分の意思で魂を吸い過ぎたため処分されたが、怪の場合は、殆ど無意識だ。…一昨日亡くなった大魔人は、去年から大病を患っていた。怪は無意識にそれを察し、吸収したのだろう。それを知ってなお、四天王は彼女を次期大魔人にするのだから…、まったく」

「その危険性を知ったからこそ、怪を近くに置きたがるのよ。…：あんな力さえ持たなければ、あの子がこんな思いすることはなかったのに」

辛い顔をする蘭玉と眉をひそめる慧翠。冷たく張り詰めた空気の中、現れたのは会議開始の連絡係だった。

＊＊

怪が訪れたのは、中央庭園。屋敷の中央部に位置し、庭園というよりも、ガラス製の大きなドーム状の温室だった。

その中にある噴水の傍らに怪は腰掛けていた。

「……………」

そこへ傷付いた足を引きずりながら、妖が現れた。

「何や、浮かない顔やね」

「！兄さん…。傷は…平気なの？」

「べつちよない（大したことない）。怪は怪我しとらんか？」

「ええ。兄さんが守ってくれたから。…ごめんね、私のせいで怪我ばかりさせて」

悲しい顔をする怪の頭を優しく撫でる。

「気にせんでええ。僕は護柱^{ナイツ}や。所属する県、お偉いさんを命賭けて守る役目がある。こない怪我、日常茶飯事や」

「そんな…！なんで兄さんがそんな辛い役目を担わなくちゃいけないの！？」

「怪。ええか？これは僕が自分で選んだ道や。全ては、“最愛の妹”を守るためや」

……………え？

今、兄は何と言った？

怪は少しの間、頭の中が真っ白になった。ここは冗談だと笑って誤魔化したいが、妖の表情があまりにも真面目だったため、怪はどうしていいか分からず、堅く口を閉ざしていた。

すると、妖の両手が怪の頬を包むようにして現れ、優しく自分の方へ向かせた。妖の細い薄荷色の瞳と目が合い、怪は恥ずかしくて視線を逸らした。が、妖が耳元で囁き、視線を戻す。

「ちゃんと、僕を見て」

「！……………っ兄さん」

「怪。好きや、めっちゃ好きや。ずっと好きやった。せやから、この勾玉も手放せんかった。僕が守るから、怪、一緒に逃げよう」

怪は妖のその言葉に、心が揺れた。

逃げる。兄さんと…？二人で…？

「…っ。ダメよ、出来ない」

怪は静かに妖から離れる。距離をとっても、体の震えは止まらなかった。

このまま兄に飛びついて、一緒にこの場から逃げたい。何もかも投げ出して。

しかし、それではダメなんだ。

「私は、大魔人・内海怪！ここで、逃げるわけにはいかないの。ごめんね。…そして、ありがとう。やっと言える。ずっと、ずっと、この気持ちを押し殺して生きなくちゃいけないと、思っていたの。私なんかを好きになってくれて、ありがとう。兄さん…、いえ、私は妖が好きです。愛しています…っ」

怪は自分の本当の想いを打ち明けられ、今まで我慢していた涙を全て流した。

その刹那^{とき}。

駆け寄った妖は、無言で怪を抱き締めた。

「兄…さん？」

「…なんや。僕ら、両思いやったんか。おおきに」

「…うん。…っうん、私、もっと、もっと、兄さんと…っ一緒にいたいよ…っ！」「っ。…」

妖は、怪の強い願望を叶えてあげられない自分の非力さに唇を噛み締めた。その悔しさをかき消すように、怪を目一杯抱き締めた。

「やっぱり逃げよう。僕が、怪を守るから。2人で、隠れて暮らそうや」

「…」。でも、私がこの力を持つてる限り、世界からじゃ逃れられない。私、逃げないよ。大魔人になって、兄さんを守るって決めたの。だから、私、」

バサツ…

怪の言葉を遮って、間に割って入ってきた黒いモノ。コートから覗く、右目の火傷の痕に、妖はギョツとした。

「内海怪。お前の力、貸してもらおうぞ」

「!…っ?!」

逃げようとした怪の腕を掴み、自分の方へ引き寄せる孤陰。あと一步のところまで届かなかった妖の手は、空を掴む。

「ッ!怪!」

「兄さっ

黒い影に包まれた孤陰と怪は、妖の目の前から跡形も無く消えてしまった。

呆然とそこに立ち尽くす妖は、おぼつかない足で砂利を踏みしめる。

そして、叫びを噛み殺し、体中の傷の激痛によって、その場に倒れる。

薄れていく意識の中で、胸の勾玉を力ない手で掴む。そして、心の中でその名を呼ぶ。

怪……

妹が兄を愛した禁忌（後書き）

*次回予告

アナタと私たちきょうだい兄妹は似ている。あなたは、アナタの愛したたった一人の姉を助けようとした。
けれど、私はもう子どもじゃないから…。

次回『氷の涙』

氷の涙

どんな形でも、愛してしまえば、誰にも止められない。

兄さん。 大好きな妖兄さん。

どうか、 もう私のために傷付かないで。

私も… 強くなるから。

*

屋敷内 とある一室

ガシヤン

薬品の瓶が床に落ちて割れた。既に何本も割れて床に散らばっており、部屋の中には薬の臭いが充満していた。

ベッドの傍らでは、今にも屋敷を飛び出していきそうな妖を抑える桑田宗助くわたそうすけと内海舜英うちみしゅんえいがいた。

羅刹と隆樹はドアの前に控えている。そして、この状態が数分続いている。

「妖クン、落ち着いて！」

「落ち着いていられへんわ！怪が連れてかれたんやで?!」

「妖！そんな体で行っても死ぬだけじゃ！今、他の管理者らや魔警団が捜してる！今は待つのだじゃ」

「ッ……！ 僕が傍にいながら、怪は攫われたんや！ 僕が…ッ俺が…ッ！」

「妖クン…ッ」

桑田は妖の強い自分への腹立たしさを感じ共感しながらも、その手を離すことは出来なかった。

「… 氷雪像 ひょうせうぞう その33 氷銀檻倉 ひょうぎんかんそう ！」

「…!?」

その時、桑田と舜英の頭上に氷の檻が現れ、2人に囲むように落下していった。そのはずみで桑田の手が離れ、妖は部屋の外に。しかし、そこには見張りをしていた羅刹と隆樹がいた。

「妖!?」

「っ！ 堪忍な」

「…!?」

妖は立ち向かってくる羅刹の攻撃をあっさり避け、背後から手刀で羅刹の首筋を打った。

「…くっ!?」

「羅刹！」

体勢を崩しそうになった羅刹を支えた隆樹の横を妖が走り抜けていく。

門を抜け、ひたすら走り続ける妖。傷が疼こうが、関係なかった。ただ、怪のことだけ考えて…。

** 逆神奈川県 とある空き地 **

目を覚ました怪の眼に映ったのは、空き地に描かれた大きな陣と、
サークル

孤陰の姿だった。

「目覚めたか、内海怪」

「っ……。私を捕まえて、何をさせる気？」

怪のその問いに孤陰は少し驚いたような表情を見せた。

「フフフツ。何を言ってるんだ。君は自分の能力チカラを知らないわけはないだろう？」

「まつ、まさか…!？」

「そう。私は、君に蘇生してもらいたい人がいる」

「一体、誰…を？」

孤陰はその問いに、表情が曇った。怪はその表情に、言葉を失った。そして、孤陰は静かに言う。

「私の姉だ」

「お姉さん…？」

「ああ。栞鳳しおんという名で、美しい人だった」

「栞鳳………、!？歴代の煉獄王！」

聞き覚えのあるその名に、怪は思わず声を荒げた。

栞鳳しおん。歴代煉獄王、第427代にして初の女王である。その残虐さは今でも畏怖され、語り継がれているほど。

「その栞鳳が…アナタの姉？」

「ああ。優しくて、美しい人だった。今も語られる姉の残虐歴史は、全て私たちの父だ。煉獄王になれなかった父は、姉を補佐する影で全てを滅した。……あれは酷いものだった」

「だから、姉を蘇生しろと？煉獄王を」

「……お前は知っているか？“煉炎病”れんえんびょうという病を」

怪は聞き慣れない言葉に、首を傾げた。孤陰は、フツと笑い話を続けた。

「煉炎病は、煉獄王に罹る不治の病だ。煉獄王が煉獄界の炎の毒素にやられて、60日間で死に至る病。姉の栞鳳しおんはそれに早く罹り、煉獄王は2年しかやっていない。……こっちは、姉はどういう死を迎えたことになっている？」

「……。悪行が過ぎて、魔王の一族に殺された、と習った」

孤陰は悲しい表情を浮かべ、再度語る。

「そうか。…姉は、とても優しい人だったよ。“初代の過ち”を修正するために、魔王との行動を計ったりしていたさ。しかし、病はジワジワと姉を蝕んでいった。…そして、最後は炎に内側から身を焼かれ、灰となった。あの姉の姿を一時も忘れたことはない。…

さあ、内海怪。我が姉を、お前の力で再びこの世界に…！」

「でも…、その人の亡骸がないと…」

「それならば、ここにある」

と、孤陰が懐から灰の入った小瓶を出して見せた。怪は、これが先程話していた『灰となった姉』だとすぐわかった。

しかし、怪は強い眼差しで孤陰にこう言い放つ。

「それは、出来ません」

「！何故だ！？」

「お忘れですか？私は次期、大魔人となります。この逆世界にとつて、煉獄王が二人になることは、決して良い事ではありません。何より、この様に私を攫って願いを叶えてもらおうなどと、私はここまでお人好しではありません！！分かったのなら、この逆世界を去りなさい。そうすれば、牢に入れることは諦めましょう」

1人の魔人として、堂々たる怪に孤陰は動揺したが、すぐに本来の調子を戻し、妖しく微笑み、指を鳴らした。

すると、怪の足元の陣が発動した。

「！？結界陣！？」

「内海怪。そこで大人しく見ているがいい。お前が蘇生する、と言うまでお前の大切な者達を殺し続けるとしよう」

「！！！」

「最初は…… やはり、お前の愛しい兄か？」

怪はその言葉に、サーツと血の気が引いた。そして、怪は懐に隠していたナイフを取り出し、自分の胸に突きつけた。

「！？」

「孤陰。私は、アナタの野望を打ち砕くためなら、この命を捨てることだって厭わないわ」

怪は震える手でナイフを突きたて

「怪！！その手を離せ！！！！」

響いたのは、兄の声。

…兄ちゃん…ッ…！！

氷の涙（後書き）

*次回予告

走馬灯のように、僕の中で流れた幼い頃の記憶。あの時も、辺り一面雪景色やった…。怪にしたこと、今でも少し悔やんどる。せやけど、あの笑顔に誓ったんや…。 “守る”と。

次回『妖の覚悟』

妖の覚悟

決して、他人には理解されないこの想い。

息をひそめて想うしかない僕ら。

それでも、守ると決めたから。

絶対に、守ってみせる！

僕ら2人は、幼い頃からずっと一緒やった。最初は今まで独り占めしとつた親の愛情を奪われた思おて、歩いて間もへん怪に意地悪いけずして雪ん中に置き去りした。夕方になつても帰つてこんさかい、仕方なく捜しに行かはつたら、怪は置き去りにされた雪だるまの隣で倒れとつた。怪は、置き去りにされとつたことも知らず、笑つて“おかえり”と言つた。その瞬間、胸を押し潰すような罪悪感が浮上し、怪をおっぱ（おんぶ）して家へと走つた。

怪は翌日、風邪をひいた。おじんにはめっちゃ叱られたけど、おとんは僕の頭を撫でてくれた。

「よく頑張つたな。怪を助けてくれて、ありがとう、妖。流石、お兄ちゃん」

「啓祐！お前は自分の子に甘いぞ！」

「ええ？我が子に甘いのは普通でしょ？和香、怪の具合はどう？」

「ええよ。最前さいぜん起きて、兄ちゃんに会いたい、て言うてはるんよ。せやけど、風邪移っちゃあかんしなあ」

「大丈夫だよ。ほら、行つておいで、妖」

僕はおとんに言われるまま、怪の部屋へ向かう。怪は赤い顔をしてベッドに座っていた。それを見たおとんは、怪をベッドに寝かせた。

「怪、起き上がっちゃダメだろ？」

「えへへ。ごめんね…パパ」

無邪気な怪の笑顔に、妖は胸が苦しくなった。

すると、その笑みが妖にも向けられた。

「にーちゃん、おはよう」

「…っ」

何も知らずに無邪気に感謝の言葉を自分へ向ける怪の姿に、妖は自分のやったことの重さがやっとなり理解できた。と、同時にこの笑顔を、この大事な妹を自分が守らなければ、という一つの決意が固まった。

妖はベッドにいる怪を見つめ、ぐっと袖で涙をぬぐって笑みを返した。

「はよう元気になってな！」

「…うん！そしたら、またあそぼ！」

嗚呼。自分はこの笑顔を守る為に、生まれてきたも同然なんや。

怪はあの時から僕の世界のすべてをやった。それを守るためやったら、僕は、鬼にも修羅にもなれる。

大事な… 大事な… 俺の妹。

「はあ… ハア… 」

無様に地面に這い蹲ろうと、

「ハア… はあ…」

無様に相手を見上げようと、

「かは…っ はあ…」

俺は、何度でも立ち上がるんや！

「孤陰エ。もう容赦せんてっ、ぶちのめしたる!!!」

兄さん。私、実は知ってるの。あの時、兄さんが雪の中、私を故意に置き去りにしたことを。でも、置き去りにされたと知ってもなお、私は兄さんを待ってたの。きつと、兄さんはここへ帰って来ると、信じて。

寒くて、もうダメかと雪に抱かれながらそう思った。けど、光の差す方から、兄さんの声があった。

「怪!? 怪!!!」

兄さんの手は温かくて、ほっとした私は消え入りそうな弱々しい声で、おかえりと言った。その後は、兄さんが必死に私をおんぶして走っているのを感じながら、意識は沈んでいった。

気付いた時、私は見慣れた天井を目にし、ここが自分の家のベッドの上だと分かった。傍らにで、母さんが私の看病をしてくれていた。

「おはようさん。体の塩梅はどうや?」

「だいじょーぶだよ。…にーちゃんは?」

「隣の部屋におるよ。おじいちゃんに怒られてんの」

「…あつちや、ダメかな？」

「ん〜。ちよう待ち。啓祐に聞いてくるわ」

母さんは部屋を出て、数分後兄さんを連れて戻ってきた。申し訳なさそうに俯く兄に、目一杯の笑顔で、おはよう、と言った。その顔に泣きそうになった兄さんは自信なく笑って、私にこう言った。

「はよう元気になってな！」

今思えば、私は兄さんによって生かされたのだ。兄に命を奪われかけ、兄に命を救われた。

だから私は、せめてこの命を兄さんのために使おうと決めた。

「兄さん、お願い。勝って！」

「…そうだな。そろそろ決着つけようか、孤陰」

傷口を抑えながら、青年は平静に、しかし瞳は冷たく、孤陰に今までにない殺気を向けた。

お遊びはしまいや。本気でいく

でエ

妖の覚悟（後書き）

*次回予告

私たちと、アナタはきつと似ているんだ。自分のために、互いのために、守る。けど、私たちとアナタでは、一つだけ、違うところがあるの。それはね…。

次回『絶対氷結領域』
オフ・ヒデイオン

絶対氷結領域（オブ・ヒディオン）

きつと、私たちは似てるんだよ。

お互いに、お互いを守りたくて、傷付いて、

でも、一番守りたいのは、自らの誓い。

私たちは、“約束”という2つの勾玉で、縛られて

どこにいても、繋がっている。

妖は懐からグローブの石と同じ、薄氷色アイスブルーの宝玉を6つ取り出し、

孤陰の四方八方にまるで結界を張るようにして投げた。

妖は石を設置すると、印を結び、何か呪文を唱え始めた。

「我は氷に属せし者。その心は冷たく凍てつき、その身は氷そのもの。全てを捧げし我に、汝の冷たき氷雪を与えたまえ」

「！その詠唱はっ まさか…！？」

孤陰は何かを察して一歩、後退あどすった。しかし、もう遅かった。石の置かれた場所まで来ると、見えない壁で退路を塞がれた。

「全てを見透し、全てを切り裂く絶対の世界よ。

道標を辿り、我が前に世界を創れ。我の敵を冷たき屍へと変える！

氷帝の王子が命ずる、『氷結限界“禁忌”その2・絶対氷結領域オブ・ヒディオン』

！！”」

すると、散りばめられた宝玉から氷の柱が生まれ、孤陰を囲むように氷柱が立てられ、伸びた氷柱が孤陰を囲み空を覆い、氷のドームを作り上げた。

「くっ！絶対氷結領域オフ・ヒドレイオン！禁忌とされる氷雪系最強の術式。囲むだけでなく攻撃にも特化している結界術の最強術。まさか、取得していたとは……っ！侮れんな、内海妖！！」

「散れ、孤陰」

妖の冷たい言葉と鳴らした指の音が氷の中で響いた。

孤陰の閉じ込められた結界の中で、背後の氷の柱が砕ける音を察した。それと同時に背に鈍い痛みを感じた。振り返ってみると、背中に鋭い氷の矢が刺さっていた。

そして、背中に気をとられているうちに、いつの間にか自分の足は氷で動かなくなっていた。

孤陰は焦りを見せながらも、冷静な口調で妖を称賛した。

「なるほど。私の足元を凍らせて動きを封じ、遠隔操作で中の氷を割って、その破片で相手に傷を付ける。…フツ。腕を上げたな、内海妖。父を超えたか」

「もちろん、それだけじゃない。これは親父の真似に過ぎない。ここからが、俺のオリジナルだ」

妖が両手を前に差し出し、まるで何かを操るかのように計画的に指を動かした。

一方、氷の中では、氷の壁がまるで液体のように揺れ、形を変えていた。

「なっ、なんだ!？」

うるたえる孤陰に真下から、氷の柱の攻撃が襲い掛かった。その切っ先は孤陰の頬を掠めたが、驚愕する暇もなく、次の攻撃が降りかかった。ぴちゃっ と孤陰の頬に冷たい液体が落ちてきた。ゆっくりと上に視線を上げると、天井の氷がまるで溶けたかのように、水となって雫が滴り落ちていた。

「溶けている…？何故だ…」

孤陰が呆然と天を仰いでいると、外にいる妖は差し出していた手を下に、立てた親指を地に向けた。

「墮ちろ」

妖の言葉に従うように天井の水は再び氷となり、その形は矢となっていた。孤陰は慌てて避けようとしたが、雨のように降り注ぐそれは、エモノを決して逃しはしなかった。

氷の刃は孤陰の腕や肩、体中に突き刺さり、鮮血を流した。

「ぐあつ！！」

孤陰はその場に倒れ、同時に氷の結界も砕けて散った。

妖は地面に刺さっていた結界の残骸の氷を引き抜き、孤陰にゆっくりと近づいていく。

「に、兄さん…？」

怪のか細い声は妖には届かず、妖は氷の刃を振りかざし、孤陰に突き刺そうとした。

意識がたゆたう中、孤陰は死を覚悟し、過去の走馬灯が頭の中を過ぎった。

「…かげ、水陰！起きて！」

木陰で昼寝をしている青年に声を掛ける女性が一人。

「ん…っ。栞鳳姉さん？」

「もう、こんなところで寝て！？ダメでしょ？」

「仕事は？」

「父様に任せてきたわ。今日も集会があるけど、どうせジジイたちのグチ話よ」

栞鳳は水陰の隣に座り、楽しそうに話しながら空を見上げた。

「ねえ、水陰。この煉獄と逆世界は、本当に一つになることが出来るのかしら？私たちの先代の煉獄王の所業によって、この世界は周りにから迫害されてきたわ。そんな私達が、本当に…」

「姉さん。そんな弱気になっちゃダメだよ。姉さんは逆世界と和平の道を辿るために、今まで頑張ってきたじゃないか」

「……そうね。もう煉炎病れんえんびょうで目は殆ど見えない。けど、まだ出来ることがあるわよね」

栞鳳しおんは水陰みかげに優しく微笑んだ。

この時既に、栞鳳しおんは煉炎病によって、ほとんど体を動かさせない状態だった。それでも、和平のために、必死に煉獄王を演じていた。

そして、姉は志半ばで命を落とした。死に際に、姉は苦しそうな表情で、私に言った。

「水陰みかげ。私の愛しい弟。私は世界を変えられず、志半ばで朽ちる。

だけど、アナタがこの世界にいる限り、アナタが私の思いを受け継いでくれる。だから、お願いね。水陰みかげ……」

弱々しく告げた姉。私はその温かさをもう一度感じたくて、私は

“水陰みかげ”を捨てて、孤高ここうに生きる“孤陰こかげ”として生きることを決め、「蘇生の魔人」を捜した。

姉のために、自分のために、

「す、まない…… 栞鳳しおん……」

孤陰が静かに目を閉じ、刃を受け入れる覚悟をした。

しかし……

「妖！やめて!!!」

怪の叫び声が響いた。妖はその声に我に返り、孤陰に突き刺さうとした刃を首元寸前で止めた。妖の後ろには、泣きそうな表情の怪が立っていた。

「怪……」

「もういい。もういいよ、兄さん！」

妖はその表情に心が痛み、氷の刃を投げ捨てた。そして、孤陰の胸倉を掴んで、上半身を起き上がらせた。

「何死のうとしてんだよ、お前」

「な…っ」

「勘違いすんな。俺はお前を助けたわけじゃない。孤陰、お前にはこの世界の法で罪を償う権利がある」

呆然とする孤陰に、妖は構わず続けた。

「…俺は、お前のやろうとしたことを全力で否定することは出来ない。俺もきつと、怪を不合理な形で亡くしたら、お前と同じことをすると思う。けどな、お前と俺じゃあ、決定的に違うところがある。

それはな、俺は道を踏み外しても、必ず俺の中の怪が止めてくれるんだ」

「っ…」

「それは間違ってる”って言うてくれる。俺の中の怪は、思い出として生きているから。孤陰、お前の姉は今でも、お前の中にいるか？」

その問いに、孤陰は答えることが出来なかった。

姉を生き返らせる。その事だけ考えていた時は、姉のあの笑顔を忘れていた。自分は、姉のために行動したんじゃない。自らのために行動したのだと、知った。

「フツ…。結局、私は何も果たせなかつたか…」

脱力した孤陰に、ゆっくりと近づき、その手をとったのは怪だった。

「確かに、アナタのやり方は間違っていたわ。けどね、いつか必ず、アナタのお姉さんの正義感が証明されたら、私が蘇らせます。…次回は、無理やりではなく、礼節を持って来てください」

怪の温かさに触れ、優しさを感じた孤影は、静かに涙した。

そして、間もなくして魔人警察が到着し、孤陰を捕縛した。他の

仲間たちは、隆樹や羅刹によって倒されたらしい。

車に乗せられる際、孤陰は一度振り返って、やわらかく微笑んで、一言告げた。

「内海妖、内海怪。お前達に会えて、よかった」

そう告げると、孤陰を乗せた車は去っていった。

残された妖と怪は、少し2人で歩いてると微かな潮の香りが漂ってきた。海が近いようだ。

「終わったね」

「せやな」

「なんか、寂しい感じ」

「せやな」

怪はそっと、妖に問いかけた。

「ねえ、兄さん」

「ん？」

「兄さんは、この後どうしたい？」

その問いに、妖は一瞬戸惑ったが、少し笑って答えた。

僕は…

絶対氷結領域（オブ・ビディオン）（後書き）

*次回予告

決して、ずっと一緒にはいられなくても。
決して、結ばれることがなくても。

この切ない想いが消えることは… ない。

次回『エピソード』

エピソード

雪が降る。

雪が積もる。

雪が…溶ける。

私達が真っ白な雪の上に残した軌跡^{あしあと}。

これは、決して消えはしない。

私達の足跡…。

「結局、2人はどうなったんだ？」

評議会議長・^{あしはらけいすい}芦原慧翠が、コーヒートを飲みながら、楽しそうに尋ねる。

その問いに、蘭玉が答える。

「逃げなかったわ。残された護衛最終日に、2人で部屋に籠もってたそうよ」

「フーン。俺だったら逃げたな」

「やらなくちゃいけないことがあるのよ」

「？」

怪は、護衛最終日に妖を部屋に呼んで、無言で鋏を差し出した。

「？何ですか」

「最後に、“兄さん”に髪を切ってほしいの」

「…切つてしもつてええの？折角、伸ばしたんに」

「いいの。そろそろ邪魔になつてきたし。お願い」

妖は少し悩んで、ゆっくり鋏を受け取った。

「仰せのままに」

しゃきん　しゃきん

と、規則的に響く鋏の音と同時に、怪の栗色の髪がバラバラと床に落ちた。

「…流石だね。兄さん、手先が器用」

「薬師は手先が器用やないとあかん、ておじんがゆつてたんや。せやから、こんなも練習させられた」

「…ごめんね。一緒にいられなくて…」

怪の小さな呟きに、妖は鋏の手を止め、それをテーブルに置くと、怪の体を後ろから抱き締めた。

「…逃げようや。苦しいことから、辛いことから。僕が怪を守つたるから。怪」

必死に説得する妖の声は、少し震えていた。そんな妖を慰めるように怪は抱き締める手に両手を添えた。

「ごめんね。私、ここに残らなきゃいけないの」

その悲しい返答に、妖は苦痛の表情を隠そうと怪の肩口に顔を埋めた。怪も泣きそうになりながらも、続けた。

「私は、私に出来る何かをしに行くんだよ。私は大魔人になって、この世界を変えたい。煉獄とこの世界てんごくを和解させたいの。そしたら、きつと孤陰さんのお姉さんを蘇生できるかもしれない。　　そうだよ？」

「……」

「逃げても、きつとすぐ捕まるわ。もう逃げない。そう、決めたの。大丈夫よ、離れていても、私と兄さんはずっと一緒よ」

そう言つて怪は、立ち上がつて柵の一番上の引き出しから、埃を被つたペンダントを取り出した。それは、妖が持っている物の片割

れだった。

「怪…それ」

「捨てたと思つた？まさか。私がもう一つを兄さんにあげたんだよ？これを見るたびに、兄さんを思い出したの」

「…すまへん。すまへんな…怪。堪忍な。弱くてすまへん。守れんで堪忍な。怪、ほんに強うなつたな」

「当たり前でしょ？“怪”の意味は、常識を超えて優れていることだよ！私もいつまでも弱いわけじゃないよ！！」

「…せやな。流石、僕の愛する怪や。……またな」

「…うん」

怪は柔らかに微笑んで妖に抱きついた。

ある日の昼下がり、蘭瑛にて。

いつも通り、店番する妖は愛用の煙管を吸っていた。その首にはペンダントがかけられていた。

「いらつしゃい」

いつも通り。

カウンターには新聞があり、その特集には『新大魔人・内海怪』とあった。

そして、今日はその内海怪の就任式だった。

【怪の屋敷】

「怪様。十二単の準備が出来ました。式に行きますよ」

「ええ。でも、蘭玉様のお古をお借りしてよろしかったのでしょうか？」

色鮮やかな十二単を纏った怪が、ドアの向こうの蘭玉に問いかけた。蘭玉の楽しそうな笑い声が聞こえた。
「フフフ。いいのよ。大切な妹分の式ですもの。もう私着れませ
ん」

「ありがとうございます。では、参ります」
美しいその姿の胸元には、ペンダントが輝いていた。

【逆茨城・芦原家】

暗い部屋で一人、何者かと会話する芦原慧翠。あしはらいすい

「そうか、式は無事終わったか。…フツ。生きる場所が違えど、お互いの切ない想いは、永遠に消えることはない…か。

……ん？いや、こっちの話だ。それより、四天王…いや、元老院はどのような決断をした？」

その問いに、会話する若い男の声は答えた。

『ディスホールド“煉獄眼の異端審問”を決定した』

「ほお…。御堂隆樹みたかたかきの…。…出勤するのが“あの男”だと知っ
たか否か。皮肉だな」

『断りますか？』

「いや、いい。引き受けよう。なあ、アキラ」

意識を少しの間、会話から外し部屋の奥に待機していた男に話しかけた。

面白くなりそうだ

エピソード（後書き）

これで、Xの章は完結です。

次回のWの章は、六月くらいに執筆すると思います。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3008p/>

東京HEAVEN～Xの章～

2011年5月10日20時10分発行